310
103

天理教の研究

東京帝國大學

中西牛郎講演

宗教談

一名天理教の研究

木下書店出版

宗教談目次

第一　天理教と佛教とは關係ありや
第二　天理教と基督教とは關係ありや
第三　天理教と神道とは關係ありや
第四　天理教の根本實義
第五　教祖
第六　天理教は世界の一宗教と成り得べきか
第七　天理教研究の方針
第八　新宗教の研究は人生無上の價値あり

宗教談

中西牛郎講演

第一　天理教と佛教とは關係ありや

古來世界の大宗教家、釋迦の如き、基督の如き、皆自教を開創せりと稱せ、即ち佛教は釋迦によりて發明せられ、基督教は基督によりて發明せられたることは、出來佛耶二教の信徒も確信し主張する所あり、然れども比較宗教及び宗教歷史の研究が進歩せる今日より之を觀れば、佛教も婆羅門教より發達し、基督教が猶太教より發達したるの事實は、最早明瞭にして

疑ふべからざるものなり、佛教と云ひ、基督と云ひ、二千年以上に起りたる宗教すら此の如し、然れば教祖開教以來僅に五六十年位を經過したる天理教が既存宗教即ち佛教、神道又は基督教に基ひて發達し、或は此等宗教より何等かの感化を受け來りしならん、との假定は尤もふる考へなるべし、是れ予が天理教を研究するに方りて、當初腦裡に浮び出でたる疑同なりし也。」

今以上の假定に基ひて、天理教と佛教との關係を尋ぬるに、予は二個の事實を得たり、一は教祖幼時の宗教的教育、二は天理教と佛教との間に於ける教理の

類似點是れなり、世人が知れる如く、天理教の教祖中山美支子は、幕政時代、大和國山邊郡三味田村の豪農前川氏方より、同郡庄屋敷村中山氏方に十四歳の時に入嫁されたる人にして、此前川氏は淨土宗の檀徒に係り、殊に教祖の慈母絹子は有名なる該宗の信者なりし、是を以て教祖の幼時より、其母絹子は之に授くるに淨土宗の經文和讃の誦讀を以てせしに、教祖は天性宗教心の絶ぐれたる人にや、將た或る境遇の爲めに然りしにや、熱心なる淨土宗の信者となり、幼年時代には殆んど信ぜられ難き程に厭離穢土欣求淨土の眞理を味ひ、十四歳の頃には、早く既に剃髮黑

衣の尼僧たらんとの望を起し、両親其他の諫喩に従ひて、辛ふじて其事を中止したる程の厭世觀を有せられたりき、かゝれば教祖が幼年時代の教育は、全く宗教的にして、教祖が宗教的意識の發達は、之を佛教の一派たる浄土宗より得られたることは爭ふべからざるの事實なり、次に教祖によりて開かれたる天理教々理の全體を通觀するに、十柱の神々の中にある大食天命は、明に是れ帝釋天の轉訛なり、然らば天理教奉教主神の内には既に印度神あるを知る可し、又天理教の根本教理たる因縁の説、浄土の説、更生の説の如きも、亦是れ天理教が佛教と共有する所なり、

然らば是等の教理は佛教より胚胎し來るといふも、誰か之を辨ずるを得ん、天理教果して佛教と關係ありとせん乎、以上二個の事實は即ち其提案也。」

斯く天理教は表面上佛教の一派と思はるゝ程の關係あるにも拘はらず、其精神に至りては全然別個なり、即ち教祖幼時の宗教的教育に於て、將た其教理に於て、天理教は佛教と歴史的關係を有するが如しと雖も、其實天理教は全く一個の新宗教なり、何とかれが佛教は厭世觀の宗教なり、殊に浄土宗は厭世觀の絶頂に達したる宗教なり、蓋し浄土宗の神體たる厭離穢土、欣求浄土の二語八字は其厭世的宗教たるを

證明して餘りあり、厭世觀とは吾人々類が生存する此の世界は苦痛多く罪惡多く悲哀多くして、到底安樂の鄉に非ず、故に吾人は此の世界の外に遁るゝことを求めざるべからず、否再たび此の世界に生れ來らざる樣に生存の根本たる意欲を斷滅せざるべからずといふ主義にして、釋迦の佛敎と近世獨逸の哲學者ショッペンハウエルの說とは、此點に於て正しく一致するものなり、釋迦は吾人々類生存の根本原因を推して之を無明に歸し、又三界は火宅なり、生老病死及び六道輪廻の苦は一切衆生の免るゝこと能はざる所なりと斷言せり、殊に支那の曇鸞、善導等に

よりて唱道せられ、我邦の慧心、法然等によりて大成せられたる淨土宗に至りては、敎祖釋迦の厭世的宗敎を極端に進めたるものにして、人世の無常を歌ふたるの悲劇なりとす、然らば敎祖中山美文子が幼年時代に兩親の膝下を離れ、人世の歡樂を忘れて剃髮黑衣生涯尼僧となりて、夢の如き無常迅速の世をすでし、彌陀の安養淨土に往生せんとの念願は、誠に是れ佛敎厭世觀の感化に外ならざりしと雖も、敎祖が四十以後始めて天啓を得たりと確信して公にせし所の天理敎々理は厭世觀にあらずして、全く之が反對なる樂世觀なり、樂世觀豈に必ずしも此の世界を

以て自然に完全圓滿なるもの、とせんや、何となれば此の世界に苦痛あり、罪惡あり、悲哀あるは事實なれはなり、然れども此の世界は本來吾人々類が無上幸福の彼岸に到達すべき目的を以て構造せられたるものなれば、吾人々類の精神及び行動にして天心に合ひたらんには、苦痛、罪惡、悲哀の妖雲何時しか消滅して天人一致の淨土實現すべしと主張するもの是れ亦樂世觀の本領なるべし、教祖が繰り返へし〳〵御神樂歌に歌ひたるものは、全く此の樂世觀なり。」

抑も教宗幼時の宗教的厭世觀を以て佛教の感化に出でたりとせば、其四十一歳開教以後に主持せる樂

世觀は、果して何に本づくとするや、是れ決して佛教にあらざるべし、天理教が一新宗教たるの價値は確かに此に存す、而して教宗因緣の說たる、佛教の說く所と粗ぼ一致すと雖も、天理教の所謂淨土は此世界外なる西方十萬億土の彌阿淨土にあらずして、吾人々類が進化の大法に從ひ、其理想を實現し得る此現世界の狀態を言ふなり、又其所謂更生は、吾人々類が佛教の所謂地獄の如き餓鬼の如き畜生の如き異類に生るゝにあらずして、向上的に度々回々人類に生るゝを言ふなり、然らば是等も亦用語を同ふして意義を異にするもの、要するに天理教と佛教との歷史

的關係は表面のみ、裡面の精神に至りては殆んど冰炭相反するものあるを免れず、二教關係ありやなきや、此に於て知る可きなり。」

第二　天理教と基督教とは關係ありや

予は嘗て天理教を攻撃したる一小冊子を讀めり其中に言ふ、天理教祖中山美支は大阪の與力、大塩平八郎が捕へて磔にしたる京都八坂の切支丹宗妖婆の遺子なり、此の因縁の故を以て、中山美支は母の遺志を繼き、如何にしても天主教を再興せんと試みたるも、時運未だ非なるが故に、天主教といふことを表面

に暴露せずして、姑らく天理教の名稱を掲げて世に起りたりと、嗚呼此の如きは眞に架空の談にして、率強附會奇を弄するにあらざんば、則ち揑造誣罔天理教を中傷せんとする者也、而して其手段の淺薄なる寧ろ識者の一嘆に値ひするに足らんや、然れども天理教と基督教との間には何等かの關係伏在するにあらざるかといふ疑問は、深く天理教を研究しつゝあるものゝ腦裡に生ずる疑問にして、我邦佐賀に久しく布教し、(*The Gist of Japan.*)の一書を著はしたる米國宣教師某氏の如きは、天理教と基督教との間に存在する類似點數個を認めたり、其中に某氏は天理教を

認めて（モノシーシカル、レリヂョン）即ち一神教とせり、然れども天理教は果して一神教なるや、將た多神教なるや、是れ天理教信徒其人と雖も、容易に解決し難きの問題ならん、何となれば天理教の一神教たると、多神教たるとは、一に天理王命の實在如何により、て解決せらるゝの問題なれば、若し天理王命を以て十柱の神々の總稱に過ぎざるとせば、天理教は言ふ迄もなく多神教なり、若し天理王命は普遍悠久の實在にして、十柱の神々は此の實在が外現する性德の表象に過ぎざるとすれば、天理教は即ち一神教なり、婆羅門教は大梵天（創造の神）韋紐（保持の神）濕婆（破滅

の神）の三體を立つるが爲めに、其萬有神教たるを害せず、基督教は父と子と聖靈との三位を立つるが爲めに、其一神教たるを害せず、天理教果して天理王命を以て十柱の神々を結び附くるの假名とせずして十柱の神々の背後に立つ一大實在なりとせば、米國の宣教師某氏が論斷するが如く、天理教は正しく是れ一個の一神教なるべし、天理教にして果して一神教なりとせば、天理教は勿論無神論を主張する佛教に類似すと言はんよりも、寧ろ一神教たる基督教に類似すと言ふを得べし。」

然れども天理教と基督教とは、同しく是れ一神教な

るが故に両教は歴史的關係ありと言ふを得ず、予は天理教の教理及び禮典に於て、將た又教祖の教育に於て、一も基督教の感化を認むる能はず、佛教と基督教とは關係なき別宗教なるが如く、天理教と基督教とも亦た關係なき別宗教たらずんばあらず、然れども比に天理教と基督教とが極めて接近する思想あり て御神樂歌の中に現はる、夫れは外でなし、御神樂歌全體の態度は基督教の聖書と同しく豫言的也、殊に御神樂歌が世界萬民改悔して甘露臺建築の期が將さに近づかんとするを報ずると基督教の聖書が世界審判の期が近づかんとするを報ずるとは人心

を警戒するの點に於て相類似し、御神樂歌が其心清淨なるものは極樂ありと歌ふものと福音書中山上の垂訓とは天國を各自の心に求むるの點に於て相類似し、大和庄屋敷の神館と耶路撒冷の神殿とは、精神的意義を表するの點に於て相類似し、教祖が高弟を木工に得たるものと、基督が漁夫に得たるものとは、卑者を高處に揚ぐるの點に於て相類似す、此他御神樂歌と聖書との類似は種々の點に於て之を認むることを得べし、然れども教祖は基督教の聖書を一讀したるの人に非ず、從ひて天理教の御神樂歌と基督教の聖書との間に於て上述の如き類似あるもの

は全く是れ自然の符合にして、天理教一切の思想は教祖に出り日本に生長發達したるものにして毫も基督教を移植したるものにあらざるなり、要するに、天理教と基督教との間には類似の點多々之れある にも拘はらず、歴史的關係は毫も存在せざるなり之に反して天理教と佛教との間には歴史的關係の事實多々之れあるにも拘はらず、教理的關係は毫も存在せざるなり。

二千年間の長き變遷を經過したる基督教は世界に大功徳を與へたると同時に、亦た種々の弊害を包藏することを免れざるべしと雖も、其教祖基督に至り

ては眞に是れ人類萬世の師表なり、基督の光榮は吾人々類が此の世界にあらん限りは日星と共に輝くべし、故文部大臣井上毅氏が基督を評して勇往猛進自ら信じて疑はず、卓言危行一世を風動すといひしは僅に是れ基督の半面を看たる言なり、基督の基督たる所以に至りては、更に是れより偉大なるものあり、而して天理教祖中山美支子が教訓が此の人類の最大偉人の理想と着々一致するものあるは、是れ基督の高尚絶大なる理想は人間以外より得來たるが如く、天理教祖の教訓も亦然らずんはあらず、要するに人は神に由りて在り、神と共に在り、神に於て在り、

此の眞理を一朝看破すれば、神人の別あし、況んや人々彼我の別をや、基督なり、教祖なり、業已に此の彼我の關門を破りて神人一致の域に進めり、而して何んぞ其教訓の着々一致するを是れ怪まんや。」

第三　天理教と神道と關係ありや

天理教は現に一個の宗教々會として、神道本局の下に隷屬したるものなれば、天理教が神道天理の名稱を冒して神道の一派たることは素より論を俟たざるなり、然れども此の關係は行政上の取締より生じたるものにして、宗教上の意義より生じたるものに

あらず、天理教果して神道の一派として認むること を得べきや否やの問題に至りては、先づ神道といふものゝ定義を確定したるの後にあらざれば解決する事を得ず、今や我邦の所謂神道なるものは、尨雜なる怪物にして殆んど把捉すべからざる者なり、之に對して定義を下だすことは頗る困難ならん、而して天理教が神道本局の下に隷屬して一派の神道たるを得るものは、十柱の神々が記紀二典の神々と其名稱を同くすると天理教會が神道本局の制規に服從するとにあるのみ、此の二者の外に於て天理教は普通の神道と、一も其性質を共有するものを見ず、之を

明言すれば、十柱の神々の名稱には、元來記紀二典になきもの二つあり、即ち大食天命及び雲夜見命是れあり、然れども今日に於ては此の二個の神は既に除名せられて他の名稱に變じたれば、先づ今日の處では十柱の神々の名稱のみは、記紀二典の神々と一致せりと言ふべきのみ、然れども一歩を進めて此の十柱の神々の性德を論ずるに至りては、一も彼と類似する所なく殆んど同名異體なり、蓋し記紀二典の神々は古代の傳說に係り、天理教十柱の神々は教祖の創唱に係る、二者既に其起源を異にすれば、從ひて其性德の一致すべき謂れなし、從ひて又記紀二典の開

闢談と天理教の創世說と一致すべき謂れなし、此の二者を強ひて一致せしめんと欲するは、恰も希臘多神教のヂユピタルと基督教の耶和華とを一視し、アポロンと神子基督とを一視し、天御中主神と彌陀如來とを一視し、高產靈神、神產靈神と觀音、勢至とを一視するが如く、到底牽强附會の企圖たるを免れず、若し天理教、果して其名實兩者を併せて記紀二典の所說に合同するの日は、即ち是れ自家の教理を拋ちて天理教を根本的より破壞し去るの日あり。」

然らば天理教は十柱の神々の名稱を除くの外は神道と稱すと雖も、普通の神道とは全く沒交涉なり記

紀二典は天理教祖の製作する御神樂歌の解釋に毫も光明を與ふるものにあらず、然れども強ひて天理教と神道とを關係を求むれば、天理教は日本に發達したるの宗教なるが故に、日本を以ていとも尊き神國とするの觀念是れなり、而して此の觀念や毫も排外攘夷的にあらず、何となれば天理教は世界濟度的大宗教にして、何づれの國民に向つても同情を表し、四海同胞の主義を執りて一切人類に對するものなれはなり、左れば或る人が嘗て基督教の十字架の意義を教祖に問ひたるに、教祖は答へて十字架は十柱の神を標表するものにして、即ち完全成就の意義なりと言へりとぞ、此の一事を以てするも、天理教祖が如何に一統宗教の理想を有したりしかを見るべし。」

天理教と神道との關係は、以上の如きに止まるのみならず、更に二者の差別を詳にすれば、記紀二典に基ける神道は神話的に太古の事を叙述するも、天理教は將來世界に實現せらるべき人類の靈的理想に重きを置き、神道は日本を中心とするの觀念を明示するも天理教は世界的濟度を目的とし、神道の神學は專ら基礎を宇宙起源説の上に置くものなるに、天理教の神學は心理的方面に重きを重く、是等は二者差別の最も著しきものなり、故に予は天理教は神道に

關係ありや無しやの問題に對しては、寧ろ無しと答へざるを得ざるかり。」

第四　天理教の根本實義

以上三章の所說の如くなれば、天理教は神道にもあらず、佛教にもあらず、又基督教にもあらざること明瞭なり、尤も天理教は神道と佛教とに幾分かの關係を有するに相違なしと雖も、此關係や表面の關係にして實體の關係にあらず、故に天理教の天理教たる實體は是等の關係以外にあるなり、明言すれば、天理教は神道にもあらず、佛教にもあらず、基督教にもあ

らざる、一個の新宗教なり、然らば此新宗教の實體、即ちそが成立する要素は如何なるものや、是れ吾輩が大に研究を要する所なり。」

凡そ人類を救ふは、世界宗教の發足點なり、佛教も基督教も、是れを目的として世に起りたるなるべし、故に濟度ふきの宗教は宗教に非ず、神宮奉齋會の如き神聖なる國民禮典の結社にして、宗教的團體たるを得ぎして、蓮門教の如き金光教の如きが、却つて宗教的團體たるを得るは、此の濟度の有無に由るなり、唯々濟度は一なりと雖も、其主持する宇宙觀及び人世觀の如何に至りては、種々異樣の宗教となる、基督が

世界人類を救はんとするの愛も、釋迦が一切衆生を救はんとするの慈悲も、其心に於ては何んぞ曾て異ならん、然れども釋迦の主持する宇宙觀及び人世觀と基督の主持する宇宙觀及び人世觀とは大なる相違あり、是れ人類濟度を目的とするの両宗教にして、而かもしかく教理を異にする所以あり、然らば天理教祖が主持せられたる宇宙觀及び人世觀は如何ん、若し教祖が主持する宇宙觀及び人世觀にして、佛教若しくは基督教と著明なる差別なしとせば、是れ天理教は佛教若しくは基督教以外に一旗幟を掲げて起るの新宗教と言ふを得ず、之に反して教祖が主持

せらるゝ宇宙觀及び人世觀にして、佛教若しくは基督教も著明ある差別ありとせば、是れ天理教は既に規模廣大なる一新宗教を築き立てたるものなり、吾輩今其宇宙觀人世觀に就ひて考究する所あらん。

天理王命とは何んぞ、是れ天理教祖が認めたる神にして、若し天理教の宇宙觀を知らんと欲せば、先づ天理王命ちふ觀念に就いて解剖せざる可らず、教祖は第一、天理王命を以て根本的實在の神とせり、即ち御神樂歌中に「モトノカミ」「ジツノカミ」とあるもの是れなり、第二、天理王命を以て吾人各自の心内に在る神とせり、即ち御神樂歌中に「水ト神トハオナジコト心

ノヨゴレヲ洗ヒキル」とあるもの是れおり、第三、天理王命を以て人類濟度の原動力とせり、即ち御神樂歌中に「助ケ玉ヘ天理王命」とあるもの是れなり、第四、天理王命を以て天啓を與ふるの神とせり、即ち御神樂歌中に「神ガデヽナニカイサイヲ說クナラバ世界一列イサムナリ」とあるもの是れなり、是等教祖の明訓に由りて天理王命の如何なる神なるかは斷定するに難からず。

先づ第一に天理王命は普遍的神なり、個體的神にあらざるなり、非人格的神なり、人格的神にあらざるなり、此點より言ふときは、天理教は唯一神教といはん

より寧ろ萬有神教といふを近しとす、然らば何故に普遍的神とするや、又何故に非人格的神とするや、試みに思へ、教祖は神を水に喩へたるに非ずや、水が地上一切の汚垢を滌ひ去るが如く、神は吾人々類の心に在る邪惡、即ち佛教の語を假りて之を云へば貪瞋癡の三毒を滌ひ去るの靈力を有するにあらずや、若し吾人々類各々個々の心にして此の如き靈力の働きありとせば、是れ即ち良心に外ならざるべし、良心は實に神の聲なり、世界億萬の人類あれば此に億萬の良心あり、億萬の良心あれば此に億萬の神聲あり、是の如くなれば神の實體は勿論唯一なるべきも其

靈力は宇宙の間に充滿して、凡そ生命の現はるゝ所光明の現はるゝ所、眞善の現はるゝ所、即ち神の現はるゝ所にあらざるはなし、此の如きの神豈に一定の時間と方處とに限らるゝ個體的神ありとせんや、又豈吾人々類の如く有限的意志を有する人格的神なりとせんや、然れば基督教の上帝、佛教の彌陀が人格的實在の觀念は不合理なりと世に排付せらるゝ日にも天理王命は猶は信念を失はざるべし、然れども此に又他の難問は起るべし、曰く此の如き普遍的非人格的神は何故に濟度の原動力となり又何故に天啓を教祖に下だすや、蓋し吾人々類を濟度するもの

は即ち濟度ちふ意志あるべし、又天啓を與ふるものは即ち聲あるべし、是れ儼然たる個體的神にあらずや、此の如くなれば天理王命と基督教の上帝佛教の彌陀とは何んの區別かあると、吾輩之に答へて曰はん、宇宙根本的實在は即ち神の本體にして、此點より言ふときは森羅萬象は皆神の發現なり、然らば死も生も、善も惡も、邪も正も、皆均しく神の發現なるか、曰く然り、然れども此中に於て永遠の趨勢あるもの是を宇宙の終局目的と認む、即ち生は永遠の趨勢なり、而して其死あるは生をして意識あらしめんが爲めなり、善は永遠の趨勢なり、而して其惡あるは善をし

て意識あらしめんが爲めなり、正は永遠の趨勢なり、而して其邪あるは正をして意識あらしめんが爲めなり、蓋し宇宙の根本的實在は所謂本覺なり、吾人々類の所謂意識は所謂始覺なり、始覺と本覺との一致は、即ち神人合一の由りて生ずる所以なり、故に吾人々類にして罪惡禍害の中にある事を自覺(即ち意識)して、濟度を要求すれば濟度の靈能自ら現はる、然らば濟度を要求するものも、神濟度を下だすものも、皆神にして神豈に個體的ならんや、即ち天啓の聲といふも、教祖心内に聽きたるの聲なり豈に世間尋常の聲ならんや、濟度や、天啓や、皆此意義を以て解釋せざ

るべからざ。」

此の如くなれば天理王命は萬有的實在なり、倫理的實在なり、進化的實在なり、此宇宙觀を有するの天理教は、今日最も進歩したる宗教的要求に應じて、終には古來宗教に代り、一統宗教たるの位置を占むることを得べし、然して今日天理教が有する所の創世談の如きは、神話の最も幼稚なるものに拘はらず、將來は科學的宇宙說と抱合して完全なる世界觀を組織するに至るべし、然らば又天理教祖の人世觀は如何ん、乞ふ是れより之を考察せん。」

天理教祖が人世觀は上述の如く樂世觀なり、樂世觀

は厭世觀の反對なり、然れども教祖は決して此の世界に苦痛なく罪惡なく悲哀なしと言はず、否、寧ろ苦痛、罪惡、悲哀を以て充滿せるを認識す、是れ其天理教を開ひて世界人類を救ふ所以なり、然らずんば何んぞ救世の必要あらんや、然り而して其厭世觀と異なる所は厭世觀は吾人々類を以て到底此の世界に在らん限りは、苦痛、罪惡、悲哀を解脫する能はずとすれども、天理教は世界の進化及び神の濟度によりて、吾人々類は若痛罪惡悲哀より救はれて、圓滿幸福の淨土實現せらるべしとす、之を有形世界の事實に比喩するに亞米利加大陸が未だコロンバスに發見せら

れざる以前は山林深莽鳥獸繁殖、往々千里人煙なく、誠に荒涼の世界にして、唯々土人が狩獵を業とするあれども、歐人が一たび之に移住するに及んで田野を闢き、礦山を掘り、鐵道を布き、都市を設け、天然を利用して工商を起すに及んでは、幾億人民の生活をも支ふべき程富裕に進みしは、眞に是れ物質的樂世觀の本領にして、先きに夫の赤色土人が同一の土地に住居しながら少量ある食物の缺乏に苦みて饑餓に逼りしを回想すれば、誠に憐むべきものあり、今日の世界亦何んぞ是れに異ならん、物質的進歩は觀るべけれども、道德的進歩之に伴はず、苦痛、罪惡、悲哀の意

識が益々文明國民の心に發生するより、或は厭世觀を起すもの多々之れあれども、教祖が創唱する濟度教にして世界に宣播し、世界億兆靈救の恩に浴するに至れば、罪惡充滿の世界も亦淨土を實現するに至べるし、要するに此の世界は圓滿完全なる發達を現すべき勢力を自體に具有せり、是れ教祖の人世觀あり。」

以上の所論に依りて、天理教は宇宙根本的實在を立て、個體的神を立てざれども、而かも濟度あり、天啓あるの宗教なることを了知すべきなり、次ぎに又天理教の人世觀は、厭世觀より轉じて樂世觀に入るものなることを了知すべきなり、此人世觀は果して健全なるものにあらざるか、又此宇宙觀は果して眞理にあらざるか、天理教の根本實義既に此の如し、苟くも此根本實義を主持して失はざれば、他に如何なる缺點あるも、如何なる弊害あるも、之を裨補し、之を革除して眞正の宗教たることを失はざるべし、而して天理教の宇宙觀と人世觀とは教祖自家獨得の見にして、決して佛教又は基督教其他外教より得來りたるものにあらざるなり。」

第五　教祖

何づれの宗教を問はず、教祖は其教の中心なり、釋迦の佛教に於ける、基督の基督教に於ける、各〻其教理の創説者たるにも拘はらず、後に至りては教祖其人の資格が却つて重要なる教理の一部分を組成するに至れり、即ち釋迦は法、報、應三身中の應身として視られ、基督は神人間の中保者として視らるゝに至れり、今日の天理教は未だ佛耶二教の如くに發達せざれば、教祖中山美支子が教理中に於ける位置と資格とは定らざれども、教祖は漸く既に天理王命の神使として視られんとす、然らば教祖はいかなる人なりしか、是れ天理教を研究するに當りて、最も重要なる問

題なるべし。」

教祖は四十一歳の神憑に至る迄は全く世間尋常の婦人なりし也、尤も幼時の宗教的教育が教祖をして厭世觀を起さしめ、兎角沈鬱の人たらしめたるは、注意すべきの事實あり、然れども此時に於ては、両親を始め何人も教祖が將來世界の大宗教家たるべしとは夢にだも想はざりしなるべし、其後中山氏に入嫁して四十一歳の曉に達する迄も又然り、極めて親切にして慈善の心に富み、且つ篤く神佛を信ぜしと云ふに過ぎざりしのみ、而して四十一歳に至りて俄然精神憑、一大變動を生じて一種異樣の人となれり、世

に之を神憑といふ、神憑とは果して如何なるものぞ。此神秘的狀態を知るものにあらざれば、未だ以て教祖を說明すること能はざるなり。」

神憑とは神人感通の狀態に名くるものにして、教祖が眞實に神を知りたるは實に此時にあり、是れより以前に於て教祖は既に神佛を信じたれども、其信仰や猶ほ世間通常の信仰にして、蓋し又偶像の前に拜跪し、神を以て我れ以外にありとせしならん、然らば教祖は如何にして此神秘的狀態を來せしかと云ふに、其感通は勿論一殺那間に起りしと雖も、實に數十年來精神苦鬪の結果なり、之が參考としては基督が

四十日間の斷食祈禱、釋迦が六年の苦行、菩提樹下の頓悟成道を想ふ可し、教祖は一婦人なり、故に基督の如くに前代の書を研究せず、況んや釋迦の如く高尙深奧なる教育を受けんや、然れども其信仰の熱誠ある に至りては、基督に一歩を讓らず、而して世界人類に對するの大慈悲心に至りては、釋迦と異なる所なし、此婦人が數十年來世界の苦痛罪惡悲哀と苦鬪して殆んど狂せんとするの信神に進みたるは、久しき間神人感通の機會を待ちつゝあり、然るに其長子秀司氏の疾病と市兵衞の祈禱とは、正しく之に機會を與へたり、是に於て神憑は起れり。」

故に神憑とは合理的に解釋すれば、教祖が濟度の要求と神の濟度とが交々感應したる狀態に外ならず、所謂神秘あり、釋迦、基督、摩哈麥の如きは固より無論、其他世界の大宗教家は皆此狀態を經過したる人なり、教祖は一たび此狀態に入るや否や、世間一切の罪惡と苦痛とは脱然として消散し、之と同時に心地光明透濶の天地に入り、世界の最高眞理眼前に呈露し來る、教祖の宇宙觀と人生觀とは此間に得たり、之を天啓と言はずして何と言はん、而して教祖の耳底には世界人類を苦痛罪惡悲哀の中より救ふべしといふ神の聲は時々刻々に響くものゝ如し、是れによ

りて教祖は人類濟度の天職を奉ずるに至れり、左れば教祖の形體は四十以前と四十以後とは猶ほ同一の人たるべしと雖も、其精神に至りては殆んど別個の人となれり、是れ神憑後の教祖あり。」

然らば教祖が婦人なりしは其教祖たるに於て何かあらん、教祖が不學なりしは其教祖たるに於て何かあらん、教祖が自ら經典を著はさゞりしは其教祖たるに於て何かあらん、教祖は只此神憑によりて教祖たるの資格を得たれば、然れども神憑は一殺那間に起りしと雖も、教祖をして此神憑に達せしむる迄には、數十年間絶大の信神、絶大の慈悲及び人世に

對する絶大の苦鬪ありて、一朝此に至りたるものゝ如れば教祖一代の生涯は猶ほ一定の順序を逐ふて發達し來りたるものと謂ふべし。」

教祖によりて說かれたりと稱せる談話に至りては、疑ふべきもの甚だ多し、然れども吾輩は唯々其根本の精神を取るのみ、若し夫れ區々たる枝葉に至りては、固より取捨する所なきを得ざるなり。」

第六　天理教は世界の一宗教と成り得べきか

天理教は今日外形の上より之を見れば、他の微力なる新宗教、即ち黑住、金光、神理教等の如きは、早く既に

管長を戴く一派獨立の教派と認められ居るにも拘はらず、猶ほ依然として神道本局の下に隸屬しつゝあるものなれば、政府の眼には神道本局はあれども、天理教はなしといふも可あり、何んとなれば政府より直接認可されたる一派獨立の宗教にあらざれば、なり、然れども顧みて信徒の數を計ふるときは三百餘萬の多きに達し、北海道、臺灣に至る迄天理教布教師も派遣せられざる所なし、此の如くなれば政府が天理教に對して其一派獨立を認可すると否とは、只是れ行政取締上の事にして、天理教の實力消長に關するの問題にあらず、故に吾輩は天理教が將來世界

の一宗教として成立し得るの望みあるや否やと云ふ問題に關しては、此行政取締上の事には、餘り重きを置かざるなり。」

古來世界の大宗教家は皆是れ國家に反抗して起りたるもの也、されば其初めや國家が單に之を認可せざるのみか、或は放逐、或は禁止、或は死刑、或は虐殺あらゆる手段を盡くして、其教に迫害を加へたるものなり、唯々國家は此の如く反對の地に立ちて迫害するにも拘はらず、其唱ふる宇宙觀及び人世觀が時代の精神に適し、殊に其教祖の感化廣大、其教徒の信仰熱誠が一世の同情を惹きたるよりして、其宗教は恰

も千里の原野に猛火を放つが如く、其傳播の勢炎々として抑ふべからざるが故に、曩きに反對したる國家も屈從して、之を公認し、遂には其力に依賴するの必要を感じ、立てゝ國教ともおすに至る、宗教にして此の勢力ふきものは、世に成立する能はず、天理教祖が開教の初に酷烈なる干渉を受け乍ら、教祖の耐忍と信徒の熱心とによりて今日迄に發達し來るものは、亦頗る古宗教の創業に類するものあり、若し今後政府の認可を得れば直ちに以て天理教萬歳なりと祝するが如きもの多々之れあるに至りては、天理教の前途も亦知るべきのみ。」

天理教は今日に於て早く既に日本の有力なる宗教となれり、此上進みて世界の宗教と成り得るや否やは、未現的事實なれば、猶ほ一の疑問あり、蓋し宗教は政治や教育と異なりて、本來世界的性質のものなり、故に宗教にして單に一國又は社會の或る部分にのみ限りて行はるゝ間は、未だ以て其宗教の成立を確保する能はず、今日天理教中の信徒或は我天理教は先づ日本全國に殘りなく行はれたる上に、外國布教の方針を執るべし抔と言ふものあるは、是れ宗教の何者たるを知らざる俗論なり、此論の如くなれば、天理教は元來大和の山邊郡庄屋敷村に起りたるもの

なれば、先づ庄屋敷村の人民が一人も殘らず信じたる上に、山邊郡の他の村落に布教せざる可らず、又山邊郡の人民が一人も殘らず信じたる上に大和の他の市郡に布教せざる可らず、佛教の如きは印度に起りたる宗教なれども、未だ全印度に普及せざる前に早く既に印度境界に流行し、基督教の如きは其起りたる猶太國民には反對せられて、却つて早く他國に傳播せり、古來宗教が國の限界に關せざるや久し若し夫れ一國に限りて他國に行はれざるものは、是れ所謂國民教のみ、世界教にあらざるなり、眞正の宗教は世界教ならざるべからず。」

天理教が將來世界の一宗教として成立すべき望みあるものは、其神道ならず佛教ならず、基督教ならざるの處に在り、若し天理教をして神道佛教基督教の何づれかに同一ならしめば、天理教は假令ひ成立し得るにもせよ、即ち是れ神道、佛教、基督教の一派として成立し得るものにして、新宗教としては成立する の權理なきものなり、果して然らば、神道、佛教、基督教の宇宙觀及び人世觀が最早今日の時代精神と齟齬して漸々信仰を失すると共に、天理教も亦衰滅に歸するを免れざるべし、或は言ふ、佛教や基督教には整然たる教理あるも、天理教には此の如きの教理なし

と、是れ根本教理と信仰條目とを混同するものゝ謬論なり、佛教にあれ、基督教にあれ、其教祖が始めて教を唱へ出だしたる時の教理は、極めて單純なり、然れども此單純なる教理は其實廣大なる宇宙觀及び人世觀を包有するものにして、之を開展するときは無量の教義を敷衍し得らるべきものなり、然れども此の如き教理の開展は、即ち今日教理發達史が研究する所にして、數百千年の間に成るものなり、故に學者は區別して原始的教理と派生的教理との二種とす、然らば吾輩が今日天理教に就ひて撿する所は教祖創唱したる教理の單純なるや複雜なるやを問はず、

又其表顯法の比喩を以てするや純理を以てするやを問はず、唯々其裡に包有する宇宙觀及び人世觀は今日時代の精神に適するや否やを問はんとするなり、或は又言ふ、時代の精神なるものは、時代に從つて變ずるものなり、永久不變なるものにあらざるなり、然るに眞理は永久不變ならざるべからず、然らば時代の精神抔と言へば、既に眞理と相遠からぜやと、蓋し時代の精神といへば、新たなる境遇に應じて、舊なる者に滿足せずして新なる者を要求する人類社會知識、感情、欲望の狀態に名づく、故に時代の精神に合するものは、未だ直ちに絶對的眞理と認ざるを得ざ

是れ天理教の宇宙觀及び人世觀が今日時代の精神に合するや否やは、直ちに其盛衰興廢の問題たる所以なり。」

然るに或は言はん、我々が天理教を信ずるは重きを教理抔に置かずして、專ら神德の靈驗不可思議なるを信ぜと神德の靈驗不可思議なるを幾分か感ぜずんは誰か敢て之を信ぜん、然れども徒らに神德を難有信仰するのみにして教理の確信之に伴はざれば、是れ神明に對するの祟拜のみ、宗教に對するの信心即ち信教にはあらざるなり、世間の稻荷、辨天、大黑不動、聖天等を信じて、御利益を被らんと欲するもの皆

此類のみ、或は又言はん、我々は教祖の德を信ずと、教祖の德固より之を仰かざる可らず、然れども徒らに教祖の德を仰ぎて之を言行の模範とし、其教理を信ぜんば、是れ人物の崇拜若しくは道德の實行に終るのみにして、宗教とは言ふ可らず、且つ教祖の偉大なる德性は、何づれより來れるかを尋ぬるときは、其宗教の信念に溯らざるべからず、要するに、宗教の最大要素は教理に在り、而して此教理の善惡邪正は、實に其教の盛衰興廢する所以のものあるを知らば、豈に教理の研究に重きを置かざるを得んや。」

然らば天理教の根本教理が佛教基督教以外に根據

を有して、而かも能く今日時代の精神に合するものは那點にあるか、既に上述したる宇宙觀と人世觀とは即ち其主要の點なり。」

佛教の如き、基督教の如き、舊宗教が今日時代の精神に適せぎして、漸々信仰を失はんとするを深く考ふれば、宇宙觀及び人世觀に於て此の二教と殆んど相反する天理教が漸く歡迎せられんとするの消息を伺ふべし、抑も佛教の如きは純厭世觀の宗教なり、之に反して天理教は純厭世觀の宗教にあらぎ、即ち厭世觀と樂世觀とを合するの宗教なり、是れ天理教が佛教より多くの眞理を含む所以なり、蓋し佛教は人

類生存の根本原因を以て無明にありとし、無明の果は即ち苦痛とするものあり、故に佛教の終極理想は人類一切の意欲を斷滅するに在りとす、是れ乃ち涅槃なり、然らば佛教僧侶が肉食妻帶の禁戒を持守するものは、畢竟此厭世觀に基くものなり、之を明言すれば、佛教終極の理想は一切衆生をして煩惱の繫縛を脱せしめ、成るべくなれば再たび人類の如き苦世界に生れざらしむるに在り、是れ佛教が或る場合によりては、深く人生の弱點に投ずる所以なり、然れども此の如きは極端の說にして、人類一般の健全なる世界觀にあらず、故に眞面目なる佛教の厭世觀を今

の世界に提出して、之が實行を强ゆるに至りては、恐らくは一人として之を信ずるものはなかるべし、之に反して天理教は此現世界を以て苦痛罪惡悲哀の世界とすと雖も、人類は自然の進化と神の濟度とにより漸次完全の域に進むものとす、故に天理教は一面に於て苦痛罪惡悲哀を排除するに盡力すると同時に、一面に於ては生活幸福進歩を奬勵するなり、是れ天理教の世界觀が最も健全にして、今日時代の精神に合する所以なり、次ぎに基督教の唯一神教人格的神は人智進歩の或る程度にありては、極めて有力なる信仰なりしかども、今日に於ては人智の進歩

最早人格的神の存在を容れず、故に基督教をして今日時代の精神に合せしめんと欲すれば、多少萬有神教の方向に轉ぜしめざるべからず、然れども哲學上の萬有神教は殆んど無神論に近くして、濟度もなければ天啓もなし、此の如きの萬有神教、豈に宗教とするに足らんや、然るに天理教の宇宙觀は一種の萬有神教にして、濟度もあれば天啓もあり、是れ天理教が其宇宙觀に於て、宗教として今日時代の精神に適する所以なり。」

然れども天理教に何如なる眞理を包有するも、多數の教徒が此眞理の輝光を認識して之を表明し、殊に

實行的方面に現はさゞれば、折角の良宗教も其重要なる眞理を沒了せられて、劣等なる迷信教と視做さゝるゝを免れざるべし、是れ豈に天理教を進めて、世界の一大宗教とするの障碍に非ずや。」

第七　天理教研究の方針

然れども以上予が天理教に就いての研究は、猶ほ重要なる一端に過ぎざるべし、詳細なる問題に立ち入りて天理教を研究せんことは予の望む所なれども、今は其力に及ばざれば、唯々左に研究の方針を示めすに過ぎざるのみ。」

天理教の研究は、事實的と教理的との二種に別かる」天理教事實に關するの研究は、第一教祖、第二教會、第三儀式是れなり、而して教祖の研究は又別かれて教祖の出現せし時勢。(一)教祖の家族。(二)其天性。(四)其教育。(五)其生活。(六)其教を開きし事情。(七)教祖と世界との關渉。(八)教祖の言行。(九)教祖布教の方法。(十)教祖の高第。(十一)教祖の沒及其遺訓等となる。」

古來大宗教の世に起るや、必ず舊來の信仰衰頽し、若しくは弊害百出して宗教界の革命を要し、若しくは人心敗腐し、社會放弛して道德上の濟度を要すべき等の事情あるに基づくもの多し、而して天理教祖が

世に起りし時勢は、佛教基督教等に比して果して如何、是れ獨り日本一國當時の事情を研究するを以て足れりとせず、必ずや世界人類に關して遠く探り博く考へざるべからず、次に教祖の家族は宗教に就いては、何如なる關係を有せし家族なるか、即ち教祖の家が淨土宗に屬し、殊に教祖の母絹子が熱心なる淨土の信者にして、教祖幼稚の時に既に淨土經文及和讃等を授けて、大に厭世趣味の信仰を教祖に吹き込みたる事實の如きは、有力なる研究材料にして、淨土宗の教理如何を知らざるものには、教祖の傳紀は蓋し解し難きものあらん、之を要するに日本封建社會

の組織、神、儒、佛三教の大意、大和の風土民俗の如きも、亦教祖傳記の幕を開くべき要鍵たりと知るべし、次ぎに一宗教の教祖は其開教前と開教後とは全く別人たるが如しと雖も、其天性は其開ける宗教に磨滅すべからざる印象を與ふるものにして、基督、釋迦等が一生を通ずるの天性を知るは、亦其宗教を解釋するに必要なるものなり、次ぎに教育は教祖を解釋するに極めて必要なるものにして、世界各教の教祖中釋迦、孔子の如きは、最も智識上の教育を受たる人と思はる、基督は之に次ぐ、回教の祖摩哈麥の如きは殆んど無教育なるものなり、然れども教育の有無深淺

の如きは、教祖たるの資格を害せざるものゝ如し、唯々學問に深きものは、智的元素比較的に多きを以て、其宇宙觀及び人世觀は頗る明晰に、之に反し、學問に淺きものは、信的元素比較的に多きを以て、其宇宙觀及び人世觀は或は明晰ならず、是れその差異ならんのみ、抑も天理教祖が受けたる宗教的教育は前述の如く頗る深かりしと雖も、其世間的教育に至りては、蓋し亦當時中等以下の婦人社會が受けたる普通教育の程度に止まるのみ、即ち習字裁縫等の外、別に多く之れあるを聞かざるなり、此の如き婦人にして廣大なる宇宙觀及び人世觀を得たりとせば、天啓に外

ならざるを知るべきのみ、次ぎに教祖の生活は如何ん、此の問題は極めて教祖の立教には關係少きが如しと雖も、其實然らず、教祖生活の程度が極めて卑かりしは、一には下等階級の同情を惹くこと多く、二は其濟度の天職を實行する意思が深摯なるを見るべし、凡そ古來宗教の開祖なるものは、釋迦、基督以下皆乞食の如き生活をなし、宗教家の目的とする所と世人一般の目的とする所との異なるを示めせり、是れに非れば慈悲博愛の教を天下に立つる能はざるべし、若し釋迦や基督にして、錦衣玉食、金殿玉樓の快を貪りしならば、其宇宙觀及び人世觀は何如に廣大に

して時代の精神と適合したるにもせよ、到底彼が如きの感化を今日に垂るゝことを得ざるべし、然らば天理教祖が凍餓に逼らんとするの貪窶に一生を苦しめて、其教を開きしは釋迦基督に讓らざるの志操と謂ふべし、且つ天理教祖の地位は、釋迦基督よりも一層困難なりしものあり、是れ或は世人が氣附かざる所なり、何んぞや、釋迦基督は一身の外に家族を有せず、尤も釋迦は出家以前には一國王子の身分にして妻もあり、子もありしがども、成道以後は之を捨てたり、唯々天理教祖は夫もあり、數多の子もあり、自己の勞働を以て一家の生活を支へたる上に、一大宗教

を開きたり、是れ其苦辛經營は釋迦、基督にだも勝れたりと言はざるを得ず、是等の點は天理教祖の一代記を研究すべきものが、特に着眼すべきことなり、次ぎに、教祖が天理教を開きし事情卽ち神憑に至りて、は、天理教事實研究の最大要點にして、予が研究した る結果は第五教祖の章に略述する所の如くあり、次ぎに、教祖と世界との關渉に至りては、其包括する所の事實極めて多く、或は教祖と自教徒との關係となり、或は教祖と他教徒との關係となり、或は會との關係となり、或は教祖と政府との關係となり、問難、反對、迫害、干渉等、凡そ教祖が發表せし新教理は

何如に當時の社會と種々の點に於て何如に歡迎せられしや、何如に反對せられしや、何如に解釋せられしや、皆研究上重要なる材料あり、次ぎに教祖の言行殊に行動は、教理の教理を事實上に證明するに於て最も大切なるものなり、次ぎに教祖布教の方針は原始的天理教の狀態を顧るべきものあり、次ぎに、教祖の高弟は教祖教法の繼續者として、教祖の感化が何如に傳へられ、教祖の精神が何如に傳へられ、教理の教理が何如に傳へられつゝあるかを見るに足る、最後に教祖の沒及び遺訓は教祖一代の精神及び事業を一括の下に窺ふに足るべきものなり。」

第二、天理教々會の研究は別かれて教祖天職の自覺。(一)教祖の教會に關する思想。(二)教會初發の事情。(三)教會の發達。(四)教會の主權。(五)教會と社會國家世界等との關係。(六)等とある、予は又是等に關して予の有せる研究の方針を示めさん。」

教會とは同一の信教を有するもの丶團體にして其目的は彼等相互に信奉する所の宗教を維持し、又は之を擴張するに在り、然るに世間國家の成立には治者と被治者との區別が必用なるが如く、教會の成立には亦教師と教徒との區別が必要あり、教師なるものは教祖に代りて研究を教導するが故に階級の上

より言ふときは、一般教徒の上にありて大に尊敬すべしと雖も、教師も教徒も皆是れ人世罪惡の中はありて、神の濟度を必要とすれば、其本體に於ては毫も異ることなし、故に人々相對するときは、教師教徒の區別ありと雖も、神に對するときは人々平等あり天理教祖には此自覺あり、而して天理教會は教祖が此自覺の上に立つ、是れを天理教會成立の基礎とす、而して教祖は世界人類は一人として罪惡の中にあらざるはなく、從つて亦一人として濟度を要求せざるものはなしと信ずるが故に、其教會は全世界を包括すべきものなり、此點より言ふときは教祖理想の

教會には世界中の各國民、各國語、各習慣各人種をも包括するものにして、今日世人が解釋するが如く、狹隘なるものにあらず、即ち今日日本に教祖の教が流行するからには、日本一國家より獨立宗教の認可を得るも必要なりと雖も、其實教祖の理想教會は日本國家よりも十倍も百倍も廣大なるものなり、是れ即ち教祖が教會に關する思想なることを知らざる可らず、次ぎに教祖開教の初は、其夫善兵衛氏を初めとし、親戚隣里の人々さへ教祖の擧動を以て、狂人とし、狐憑としたる位なれば、政府が其教の善良なるを認めそうな筈はなく、教祖の説教を禁じ、教徒の集會を

禁じたる程の干渉を行へり、此の如き干渉の下に教會が成立すべき筈はなかりしと雖も、教祖が濟世の天職と教徒が熱心なる信仰とは、到底干渉の威力を以て抑ふべきに非ず、是に於て久しく政府干渉の下に苦しみたる天理教會は、一朝時機を得て生長したること、恰も嚴冬霜雪の下に苦しみたる草木が陽春に遭ふて萌芽を發するが如し、是れ明治維新後信教自由が確立したる時の情況なり、故に天理教會が僅々十餘年間の短日月を以て、四百餘萬の教徒を名簿に上ぼすに至りたるは、驚くべき現象には相違なしと雖も、教會が此の如き迅速なる發達を見はしたる

は、即ち教祖開教以來數十年間潛勢力を養ひ來りたるの結果と政府干渉の反動なりと言はざるを得ず、次ぎに、天理教會の主權は何人が之を握り居るや、是れ天理教會が將來發達に關する重要なる問題なり天理教は教祖の理想に從へば、固より世界主義なり、と雖も、教會の大教長は、血統門閥を重んずる日本流義に從ひて、教祖血統の中山家に於て之を世襲することに確定せり、此の制度ば果して教祖本來の教理と一致するや否やの問題は姑らく置き、此の如く世襲的大教長ば人物を以て撰立の標準とせず、血統を以て撰立の標準とするが故に、偉大なる大教長も出

づる代りには、亦尋常ふる大教長も出づることありと假想せざるべからず、然らば今日天理教會の發達に最大必要なる教理の解釋及び裁定は、大教長特權の下に別に一の機關を設けざるべからず、次ぎに天理教會と社會(慈善教育の問題を含む)との關係、國家(信教自由と安寧秩序との問題を含む)との關係、世界(世界的布教の計畫を含む)との關係如何ん、是れ亦愚見あれども今日の論ずる所に非ず。

第三、儀式の研究は別かれて祭式(一)神樂(二)祈禱(三)の三事となる、此中祭式は天理教が神道本局の下に隸屬する神道の一派として表面上神道より假り來り

たるものにして、天理教固有の禮典に非ず、天理教固有の禮典なるものは、神樂と祈禱とにして、其精神は御神樂歌之を盡くせり、抑も天理教固有の儀式は外形に現はれたる所にては、儀式に相違おきも、其精神に至りては全く是れ神が吾人々類に濟度を與へ、又吾人々類が神に要求するの方法にして、其重要なること言を待たず、而して天理教の神人交感は此等の内に在る也、是れ亦愚見あれども、之を明説するに今は其時機に非るなり。」

天理教々理に關するの研究に至りては、事實的研究よりも更に大切なるも、若し其研究の方針にして宜

きを得ざらば、將來世界に成立すべき新宗教も迷信となりて終はらん、否淫祠邪教となりて終はらん、然らば今日教祖眞實の遺弟となりて教祖の輝光を發揮せんと努むるものは、教理的の研究に就いて深く考へざるべからず、即ち教祖の廣大深奥なる教理は、奇怪なる比喩を以て掩はる、此の比喩の雲霧を排し去るにあらずんば、何によりてか其中に隱くるゝ眞理の天日を仰ぐことを得ん、然れども此の比喩も一たび既に眞理の天日を仰ぎたる以上は、外面奇怪に見るとも、亦決して無意義にあらず、而して其研究の方法たる種々あり、曰く教祖の遺訓及び教理に就

いて分析總合の方法、曰く他宗教との比較、曰く比喩と眞理との關係、曰く神秘的直觀是れなり、而して神秘的直觀は即ち教祖神憑の狀態にして常人の妄りに進入すべき境界に非るなり。」

第八　新宗教の研究は人生無上の價値あり

予は天性宗教の研究を好み、無宗教の家庭に育ちたるも、幼少の頃より宗教の談に耳を傾け、青年時代に至りて長崎大浦の英國監督教會の教校に入り、英語學習の傍ばらに新舊約書の講義を聽き、其後西京同志社學校に入りて、同しく基督教を研究し、依りて以

て基督教の一班を窺ふことを得たり、佛教に至りては之を研究するの年限、基督教に於けるよりも更に長く、從ひて佛教關係の書類を讀むも亦少しとせず、然れども予は基督教を學びて眞の基督教徒たること能はず、又佛教を學びて眞の佛教徒たる能はず、是れ蓋し予に先天的一種の宗教觀を有するが爲めにあらざる歟、是を以て基督教も佛教も予に無限の趣味を與へたりと雖も、予は終に佛教や基督教を以て滿足するものにあらざるなり、然らば則ち予の所謂自家先天的の宗教觀は如何ん、第一に宇宙の根本的實在を開示するものならざるべからず、第二に人生

に無限の價値を附加するものならざるべからず、第三に宇宙の根本的實在と吾人々類との間に神秘的交通を開くものならざるべからず、是れ其要點なり、佛教といひ、基督教といひ、此の最大問題に多少の光明を與ふるものにあらざるも、未だ予を十分滿足せしむるに至らず、此に於て予は世界現存の宗教に向て漸く愛想盡かしをなし去らんとするの時に際し、端なくも予が一生忘るべからざる一友人現はれ出でゝ、予に勸告するに天理教の研究を以てせり。」

予は天理教なる名稱を耳するや否や、腦裡忽ち淫祠邪教の聯想を生じたるも、一片の好奇心に驅られて、

天理教會の中央本部たる大和丹波市三島の里に入りたるは、實に明治三十三年の春なりき、然るに世間の風聞と事實とは大に相違し、先づ本部に常勤せる先生、即ち教祖の遺せる高弟等は、何づれも清高溫和にして、神を敬し人を愛するの心を備へ、殊に彼等が何づれも神秘的感動に打たれて大悟徹底したるは一種異樣の眼光に見はれたり、是に於て予は彼等の教誨を受くる半年の久きに及んで、始めて天理教の根本實義を心得するに至れり、而して其結果たる予は天理教の宇宙觀及び人生觀が自家先天的宗教觀とが深く一致する所あるを發見せり、予夫れ終に天

理教徒たらん哉、嗚呼予夫れ終に天理教徒たらん哉、然れども予や宗教家としては天性餘りに多情にして、名譽を愛し、智識を愛し、文學をも愛すれば、天理教眞理の根本に於ては確かに心得ありと雖も、予は既に天理教の阿難・迦勝たる能はず、又彼得・保羅たる能はざれば、予は宗教界に於て無盡藏を發見したるを以て、予の能事既に畢れりとし、以て止まんとす。」

世に天理教程不評判の宗教は無し、或は邪教淫祠として賤められ、或は風俗壞亂として咎められ、或は衛生妨害として禁ぜられ、或は國體破壞として疑はれ、唯々世人が天理教に就いて驚く所のものは、其信徒

が三百餘萬の多きに達すといふの一事是れのみ、巍然たる會堂が三府以下各都市に屹立するの一事是れのみ、數十百萬の布教資金が中央本部の金庫に貯藏せらるゝといふの一事是れのみ、而して天理教が懷疑日に盛んにして、信仰日に衰へ、両本願寺の勢力を以てすら漸く將さに自滅に陷らんとするの今日にありて、獨り榮へ行きつゝあるものは何如なる理由ありて然るや、恐らくは其未だ解し得ざる所ならん、本談第二章に語りたる外國宣教師は天理教を評して唯一神教と言ふたるのみならず、更に倫理的宗教（エヂカル、レリヂヨン）布教的宗教（ミシヨナリー、レ

リヂョン）と言へり、外國宣教師が此の評言は誠に注意すべきものなり、倫理的宗教とは豈に吾人々類の道德的行爲に感化を有するの宗教なりといふ意義にあらずや、布教的宗教とは豈に世界を濟度するの活因を有するの宗教なりといふ意義にあらずや、而して此の感化や活因や、何づくより來たる、豈に其宇宙觀及び人生觀が深く時代の精神に適するより來らずや、吾輩此に於て天理教を將來世界に成立すべき一新宗教なりと斷言せざるを得ざるなり。」

然れども天理教の發達を妨害するもの何んぞ限らん、苟くも眞正に天理教徒を以て自ら任ずるものは、

布教に熱心なると同時に、此の妨害を排除するを以て自ら任ぜざるべからず、試みに其重要なるもの一二を擧ぐれば、先づ教内階級の愈々懸隔する是れなり、天理教は教祖の精神が、多くの點に依然猶ほ存し、今日大教長の勤儉、御本席の謙讓、何づれも稱贊すべきの美德なりとす、殊に天理教は精神的平等主義を以て世に起りたるものなれば、貴賤貪富の間に横たはりたる非自然的阻隔は成るべく之を排除して人心の奥底に潛まりたる同情の念を發起して、血あり涙あるの世界たらしむるは、教祖本來の主義に合ふものとこそ言ふべけれ、然るに一たび教會を組織し

てより、會長と普通信徒との懸隔漸く甚しく、教會外の階級に重きを置かざる教會内の階級は往々嚴重に過ぎて教祖平等同情を旨とするの主義をも相容れざるもの少しとせず、是れ其弊たる未だ甚しと言ふ程にはあらざれども、亦注意を要すべきの一端なり、次ぎに少數なりと雖も、天理教の一部分は早く既に小成に安んずるの傾きを生じ、天理教世界的宗教の理想を實現するが如きは遠き未來にありとし、今日の處は先づ現狀を維持するを以て急務とし、只管社會の攻擊、政府の解散のみ惴々として是れ懼れ、兎に角世に著しく世に目立つものは之を控目にし、以

て無事を祈らんことを圖る、是れ全く宗教に對する信念の薄弱より生ずと雖も、其臆病も亦甚しく、天理教の發達を阻害するもの、畢竟此種の人たらざんばあらず、而して天理教徒中更に一種の偏見と言ふべきは世間の學問を以て縱ひ教理の敵とせざるも、認めて友とせざるに在り、曰く天理教は學問の力を假らず、曰く學者は天理教を信んぜず、曰く學問盛んなれば天理教衰へん、是れ吾輩が往々耳にする所なれども其實癡人の囈語たるに過ぎず、若し學問の爲めに衰滅する位の天理教なれば、殆んど是れ人生の最大問題を解釋するの價値なきものなり、宗教は何如

に信念を要すればとて、妄信と迷信とは眞正の信念にあらず、眞正の信念は人智と撞着せずして、而かも總べての學問に超絶したる最高眞理を以て之が對象とせざるべからず、果して然らば學問は宗教の殿堂に進む殿堂こそ言ふべけれ、學問宗教を破壞すべき抔と思ふは是れ未だ學問と宗教との關係を知らざるものなり、世の學者宗教を信ぜずといふは何如にも事實なれども、是れ學問の罪にあらず、又宗教の罪にあらずして、即ち學者其人と宗教家其人との罪なり、所謂學者は不學者に比すれば知る所あり、此に於て其知る所に泥みて、我が知る所の外に眞理なし

として宗教を求めざるは學者の罪のみ、宗教家は一切人類を濟度するの天職を負ふものなり、而して學者も亦人類中の一人なれば、宜しく之を開導すべく、宜しく之を敵視すべからず、宗教家が學者を敵視するは其智識あるを畏れてか、抑も其傲慢なるを忌みてか、何づれにせよ博愛と同情とを以て旨とすべき宗教家に似合はざる振舞なり、宗教が學問の力を假らずとは至當なり、然れども學問も宗教も、何づれも宇宙及び人生の眞理を顯示するものにして、學問の眞理と宗教上の眞理とは、必ず聯絡する所あり、此聯絡線を辿りて學問宗教の關係を明かにするは、世の

宗教家が當さに盡力すべき所なり、而して天理教の如き人智開發の今日に現はれたる新宗教は殊に最も然りとす。」

予は又天理教と吾人日常生活との問題に就いて講演する所あらんと欲するも餘り長くならんことを恐れて、此問題の講演は他日に讓るなり。」

明治三十六年二月八日印刷
明治三十六年二月十四日發行

演説者　中西牛郎

發行者　奈良縣山邊郡丹波市町大字三島　木下松太郎

印刷者　大阪市東區北久寶寺町一丁目八十一番邸　濱田正夫

印刷所　大阪市東區北久寶寺町一丁目五十八番邸　濱田日報社

電話東千參百參拾八番

316
103

316
103

316
103

014109−000−1

316−103

宗教談　一名，天理教の研究

中西　牛郎／述

M36
ABB−0382